様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21　年　6　月　1　日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：２００６～２００８
課題番号：１８７２００２５
研究課題名（和文）　中世王権と絵所預の絵巻制作に関する基礎的研究

研究課題名（英文）　A Study on Medieval Court Painters and Handscroll Paintings

研究代表者
髙岸　輝（TAKAGISHI　AKIRA）
東京工業大学・大学院社会理工学研究科・准教授
研究者番号：８０４１６２６３

研究成果の概要：
中世後期における朝廷および将軍家周辺の絵巻制作、特に絵所預土佐派が関与した作品の精査を行い、これらの様式や主題が中世前期成立の絵巻の再生としての側面を持つこと、そして室町将軍歴代が理想とする政権構想を反映したものであることが明確となった。また、応仁の乱後に活躍した土佐光信は、現地で取材を行ってリアルな景観を絵巻に表現しており、新たな近世的風景観の創出に大きな役割を果たしたことが指摘できる。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,500,000	0	1,500,000
２００７年度	900,000	0	900,000
２００８年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,300,000	270,000	3,570,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・美学・美術史
キーワード：絵巻、土佐派

１．研究開始当初の背景
一九七〇年代末から主要な絵巻については全巻のカラー図録が刊行され、国文学、宗教史、絵画史料論など多岐にわたる分野で絵巻を題材とする研究が進展してきた。これらの制作を主導したのは、中世各時代の聖俗の権力であり、絵所預の任にある絵師が絵を描いている。彼ら絵所預は各時代を代表する画風を構築し、同時代や後世に大きな影響を与えている。絵所預周辺で制作された主要な作例の調査による詳細な様式比較、文献史料の精査を通じ、絵巻の制作・コレクション・鑑賞の実態に迫る必要がある。

２．研究の目的
中世王権（平安末から室町末に至る公武聖俗の権力を総称）がいかに絵巻を利用していたのかについて、鑑賞の実態を作品と周辺史料から検討し、作品の持つ社会的意義を明らかにするとともに、ここに関与した歴代絵所預（宮廷の御用絵師的存在）の活動の実態、様式の確立とその影響・変遷について展望することを目的としている。

３．研究の方法
従来、美術史では着目されてこなかった政治

史関係史料の精査に主眼を置き、同時代の政権の動きと絵巻成立過程の連関を明らかにした。また、各絵巻の舞台となった寺社等の現地景観の取材と画面との比較を行った結果、室町後期において景観描写のリアリティー表出の源泉を突き止めることができた。

４．研究成果

「融通念仏縁起絵巻」「槻峯寺建立修行縁起絵巻」「清水寺縁起絵巻」という室町期の最重要作例に関して、それぞれ足利将軍家や有力大名との関係を示す個別作品研究を論文として発表したほか、より範囲を広げ、15 世紀において絵師が、中世的表現から近世的なものへと変貌する様相を大局的に捉え、国内外の学会等で発表した。これらの成果を総合し、2008 年秋に刊行した『室町絵巻の魔力』を単著として刊行した。以下、本書の構成に従って具体的な研究成果を記す。

(1)15 世紀初頭、三代将軍足利義満は北山殿において絵合（古今の絵巻等を比較し、優劣を競う遊芸）を催した。これは『源氏物語』絵合帖を「先例」とし、公武政権を事実上支配するまでになった義満が敢行した政治的デモンストレーションであった。北山殿の所在する北山は、『源氏物語』において光源氏が若紫を見初めた地とされていることから、ここでの絵合は、『源氏物語』の聖地での開催という重大な意味を持つことになる。『看聞日記』には、ここに春日社が所蔵する「春日権現験記絵巻」が出品されたことが記される。近年、末柄豊氏の研究によって、14 世紀初頭に西園寺公衡周辺で制作された同絵巻は、すぐに春日社に奉納されたのではなく、一時期、京都北山の西園寺邸に保管されていたことが明らかになっている。この西園寺邸の跡地に建てられたのが北山殿であるから、同絵巻の出品は、もとあった場所への帰還を意味することになる。また、「鹿苑院殿東大寺受戒絵」なる絵巻も、この絵合に際して制作された可能性がある。これは、義満の南都支配を象徴する応永二年の東大寺での受戒を描いたものであると推定されるが、同絵巻は同時代の記録としての意味を持つ。絵合の主催者である義満自身の行動を描いた絵巻が出品された背景には、『源氏物語』において光源氏の須磨流離を描いた絵が出品されたとことを先例としているものと推考される。つまり、義満の絵合では、彼自身を光源氏になぞらえようとする意図があったと考えられる。また、その後の室町期を通じた、公武の権力における絵巻の収集や制作は、この絵合をひとつの起点とするもので、秘蔵性の高い絵画は権力の象徴として機能していた。

(2)『看聞日記』等に記録された絵巻をリストアップすると、「室町殿御絵」と称される、足利将軍家コレクションの絵巻が 16 点確認される。これらは、初代将軍足利尊氏、二代義詮、三代義満、四代義持、六代義教らの周辺で制作・収集されたものである。これら絵巻はほとんど現存していないが、主題や記録等から復元すると、将軍家の武威発揚を目的とした合戦絵、神仏の霊威に期待する縁起絵巻がその多くを占めている。なかでも、尊氏・義詮の周辺で制作された「泰衡征伐絵」は、源頼朝による文治五年の奥州征伐を主題とする絵巻で、その後の源氏政権・鎌倉幕府の基礎を築いた合戦を描く。源氏の末裔を自認する尊氏が、室町幕府の草創期である 14 世紀中期に制作させた同絵巻には、自らを頼朝に重ね、政権の正当性を主張する目的があった。同絵巻の前半には、源義経が滅亡した衣川の戦いが描かれているが、絵巻自体の成立した時期、尊氏は弟の足利直義を暗殺し、その怨霊に悩まされていた。つまり、尊氏は同絵巻において、義経と直義を重ねることによって、その鎮魂をも意図したと推察される。同絵巻の絵は藤原行光が携わっている。行光は室町土佐派の祖であり、北朝や尊氏・義詮・義満の周辺で活躍している。室町時代を通じて、行光の子孫である土佐派が将軍家や公武の絵巻制作を主導するが、「泰衡征伐絵」はその原点に位置する。

(3)14 世紀から 15 世紀を通じて、転写が繰り返された「融通念仏縁起絵巻」は、平安期に活躍した融通念仏の開祖良忍の伝記と没後の念仏功徳譚を描く。室町初期に活躍した融通念仏聖の良鎮は、その勧進活動の中で将軍家をはじめとする有力者の助縁に成功し、明徳二年に版本「融通念仏縁起絵巻」の開板を行った。この明徳版本のうち大念佛寺本の奥書には「美濃守助景」とあるが、従来、不詳とされてきた。花押の分析により、これが備前守護代の浦上助景であり、彼は所司代を努めるなど政権中枢に近い武家であることが判明した。また、明徳版本の詞書を染筆した法親王や公家らは、染筆日付を記しているが、その冒頭部分は、二代将軍義詮の二十三回忌祥月命日と合致する。つまり、有力武家の関与と、義詮追善という明徳版本の性格、そして絵巻をすべて版画で表現するという、空前の大企画であることを勘案すると、これが義満の周辺で主導された可能性が極めて高いことが指摘できる。さらに、明徳版本の転写本である清涼寺本は、後小松上皇、足利義持、有力大名、法親王、公家などを詞書に参加させた肉筆絵巻の豪華版であるが、染筆日付が義満七回忌祥月命日に集中することからも、義持による父の追善が制作目的と考えられる。また、禅林寺本も、同様に詞書参加者の

顔ぶれや染筆日付の分析を通じて、八代将軍義政による父義教の追善が目的であったと判明する。こうした室町期を通じた「融通念仏縁起絵巻」の転写は、将軍による父の追善という名目によって、連綿と制作されているところに意義があり、同時期の権力と絵巻の関係を象徴する。

(4)永享五年四月二十一日、六代将軍義教は、河内の誉田八幡宮に「誉田宗廟縁起絵巻」「神功皇后縁起絵巻」を、豊前の宇佐八幡宮と山城の石清水八幡宮に「八幡縁起絵巻」をそれぞれ奉納した。このうち、現存する「誉田宗廟縁起絵巻」「神功皇后縁起絵巻」は、前者が絹本に、後者が紙本に描かれており、いずれも清和源氏である足利将軍家の守護神八幡神（応神天皇）とその母（神功皇后）を主題とする絵巻である。これらが、将軍家の武威を象徴し、政権の安定を祈願する内容であることは明らかであるが、誉田八幡宮の二絵巻には「先例」があったと推察される。それは、鎌倉期に西園寺（藤原）公衡によって藤原氏の氏神である春日社に奉納された「春日権現験記絵巻」、そして同じく藤原氏の氏寺である興福寺に奉納された「玄奘三蔵絵」である。前者は絹本に描かれ、高階隆兼による明快な色彩と精巧な建築空間の描写など格調高い画面を示す鎌倉絵巻の最高峰であるが、「誉田宗廟縁起絵巻」において、絵師はそれを下敷きとするかのような精密で謹直な表現を行っている。また、「神功皇后縁起絵巻」は、皇后のいわゆる三韓征伐の場面などにおいて、「玄奘三蔵絵」が基調とする異国人物や風俗の表現を踏襲している。室町中期においても、将軍家の周辺で、過去の名品を再生させるかのような絵巻制作が行われていることは注目される。

(5)九代将軍足利義尚は、応仁・文明の乱のさなか、公家や武家、そして寺社から大量の絵巻を借りだしていることが記録等に見える。それまでの将軍が制作・収集してきた絵巻は、一大コレクションであったが、多くは戦乱の余波で失われたようで、その枯渇を埋めるかのように青年将軍は絵巻に熱中する。本願寺三代覚如の伝記を描いた「慕帰絵」も、義尚に貸し出されたものと思われ、十巻中二巻が失われ、文明年間に補作された。こうした、義尚の絵巻熱の中で、小絵と呼ばれる新たな絵巻が浮上してくる。15 世紀前半に成立した小絵は、縦幅が通常の半分の小型絵巻で、その多くは後の御伽草子につながるような物語を描いている。義尚は小絵を愛好し、他家から借り出して、手許に留め置いたものもあった。それまで、秘蔵と限定的な公開によって、その聖性を保持してきた特殊な宝物としての絵巻は、小絵の登場、そして義尚という新たな批評眼を持った権力者の出現によって、鑑賞性という新たな価値を得ることになる。

(6)米国ワシントンのフリーア美術館に所蔵される「槻峯寺建立修行縁起絵巻」は、明応四年に成立した絵巻で、摂津・丹波国境の剣尾山頂にかつて所在した月峯寺の縁起を描く。絵は土佐光信、詞書は公卿の橋本公夏が起草・染筆した。同絵巻については、海外に所蔵されることもあり十分な検討が行われてこなかったが、主題は山岳修験に基づく寺院開基譚であることや、月峯寺の地理的位置から考慮すれば、これが摂津・丹波守護であり、修験道に深く傾倒した細川政元を注文主として推定するにいたった。絵巻の内容は、聖徳太子から異国調伏の地に寺院建立を命ぜられた百済僧・日羅による月峯寺開基譚であるが、ここからは細川氏と敵対する大内氏への調伏という目的が浮上する。政元は、絵巻成立の三年前に明応の政変と呼ばれるクーデターに成功しており、これは戦国時代の下剋上の始まりと解されるが、それまで絵巻制作の中心にいた将軍家に代わって大名家が参入してくる点からも、戦国絵巻の嚆矢であると位置づけられる。

(7)戦国時代の永正年間に成立した「清水寺縁起絵巻」は、平安初期、坂上田村麻呂による清水寺の草創とその後の霊験譚を描く。制作は近衛尚通と興福寺一乗院良誉が主導し、三条西実隆や中御門宣胤らの公家が参加し、絵は土佐光信が描いている。同絵巻の内容を精査すると、前半部は事実上、田村麻呂による蝦夷征伐を主題とする合戦絵巻であることがわかる。田村麻呂は伝説の征夷大将軍であり、その活躍は、同時代の将軍と重ねられていた可能性がある。尚通と良誉の兄弟は、十代将軍足利義稙とは縁戚関係であり、彼らが絵巻を制作させたのは、伝説の将軍に義稙をなぞらえて、清水寺本尊の霊験によってその武威を守護するという目的があった。

(8)応仁・文明の乱後の半世紀、画壇の頂点である絵所預の地位にあった土佐光信についてはこれまでにもさまざまな研究が行われているが、その視覚の革新性については指摘が少ない。「槻峯寺建立修行縁起絵巻」の冒頭部分、剣尾山が描かれているが、現地に赴いて現在の山容と比較したところ、光信が現地でスケッチを行っていたことが明らかとなった。それまでの風景の描き方は、観念的な情報に基づくものであったことを考慮すれば、光信の描く剣尾山は、絵師が現地でスケッチを行ったきわめて早い例ということになる。現実の空間を把握し、その遠近関係を記録する行為は、16 世紀初頭に光信の周辺

で始めて成立したと思われる「洛中洛外図屏風」ともつながる。

(9)「桑実寺縁起絵巻」は、16 世紀半ばに十二代将軍足利義晴の命により、三条西実隆が詞書を起草、土佐光茂（光信の子）が絵を描いた。このころ、将軍家は二系統に分裂し、その実権は弱体化、戦国の群雄割拠へと傾いていく時期であり、絵巻制作を命じた義晴も当時京都を離れ、近江の桑実寺仮寓中であった。その仮幕府の地を荘厳し、本尊薬師の加護を期待しての絵巻制作である。絵師は京都と近江を往復し、現地のスケッチに基づいて新しい絵巻を完成させ、実隆は奥書に天文元年八月十七日の日付を記した。この日付について、従来検討は行われてこなかったが、これが実隆の親族である公家の甘露寺親長の三十三回忌祥月命日であることが判明した。将軍の絵巻制作目的とは別に、実隆は自らの親族の忌日供養を絵巻に託したことになる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　6　件）

①髙岸輝、「美術史の一五世紀」、『日本史研究』546、46-60 頁、2008 年、査読有

②髙岸輝、「『融通念仏縁起絵巻』明徳版本の成立」、『室町時代研究』2、2008 年、140-153 頁、査読無

③髙岸輝、「十五世紀絵画のパースペクティブ―土佐光信のリアリズム」、『文学』9 巻 3 号、99-108 頁、2008 年、査読有

④髙岸輝、「『清水寺縁起絵巻』の征夷大将軍―坂上田村麻呂と足利義稙―」、『大和文華』117、25-40 頁、2008 年、査読無

⑤髙岸輝、「足利義満の造形イメージ戦略―肖像と絵合をめぐって―」、『ＺＥＡＭＩ―中世の芸術と文化』4 号、83～96 頁、2007 年、査読無

⑥髙岸輝、「室町時代における高階隆兼の伝説形成」、『美術史論集』7、1-9 頁、2007 年、査読無

〔学会発表〕（計　4　件）

①髙岸輝、「フリーア美術館所蔵『槻峯寺建立修行縁起絵巻』と戦国時代のランドスケープ」、奈良絵本・絵巻国際会議、2009 年 3 月 27 日、フリーア美術館（米国ワシントン）

②髙岸輝、「細川政元の修験道と『槻峯寺建立修行縁起絵巻』の成立」、名古屋大学比較人文学先端研究会、2008 年 12 月 21 日、名古屋大学

③髙岸輝、「美術史の十五世紀」、日本史研究会大会、2007 年 10 月 13 日、立命館大学

④ Akira Takagishi,"The Collection and Production of Picture Scrolls (Emaki) by the Ashikaga Shogunal Family", Reinventing the Past: Antiquarianism in East Asian Art and Visual Culture, November 4 2006, The University of Chicago

〔図書〕（計　4　件）

①徳田和夫編、髙岸輝他、『お伽草子百花繚乱』、笠間書院、1～623 頁（担当 587～600 頁）、2008 年

②髙岸輝、『室町絵巻の魔力―再生と創造の中世―』、吉川弘文館、2008 年、1-199 頁

③新関公子監修、稲本万里子・池上英洋編、髙岸輝、他『イメージとテキスト―美術史を学ぶための１３章』、ブリュッケ、1-408 頁（担当 136-152 頁）、2007 年

④中世文学会編、髙岸輝、他『中世文学研究は日本文化を解明できるか』、笠間書院、2006 年、1-405 頁（担当 136-152 頁）

〔その他〕

『室町絵巻の魔力』について、次の新聞、雑誌等で書評・紹介が行われた。

『朝日新聞』2009 年 4 月 2 日夕刊（紹介）

『出版ニュース』2008 年 11 月上旬号（紹介）

『週刊読書人』2008 年 11 月 7 日（黒田智・早稲田大学助教による書評）

『藝術新潮』2008 年 11 月号（紹介）

『朝日新聞』2008 年 10 月 12 日朝刊（石上英一・東京大学教授による書評）

６．研究組織

(1)研究代表者

髙岸　輝（TAKAGISHI　AKIRA）

東京工業大学・大学院社会理工学研究科・准教授

研究者番号：８０４１６２６３

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし